



海鳥って、どんな鳥？

うみどり

海鳥は、その名の通り海に暮らす鳥たちで、沿岸や沖合など、海を生活の場としています。繁殖の時には陸地を使いますが、その一生の9割以上を海上で過ごします。この企画展では、次のパネルで紹介する8つの目の鳥を海鳥として紹介します。海鳥に含めないこともある鳥としては、ひはんしょくき非繁殖期に海上に分布するシギ科ヒレアシシギ属の2種と、日本では海上で見られることの多いアビ科の4種とカイツブリ科の4種も海鳥として展示します。



▲日本の海鳥で最大のアホウドリ（左）と、最小のアシナガウミツバメ（右）。ともにミズナギドリ目の海鳥だが、大きさが異なり、アホウドリは翼を広げると2m以上あるが、アシナガウミツバメは40cmほどしかない。



▲海上で餌をとるハイイロヒレアシシギ。
海面に浮いた流れ藻もの周辺を好む。



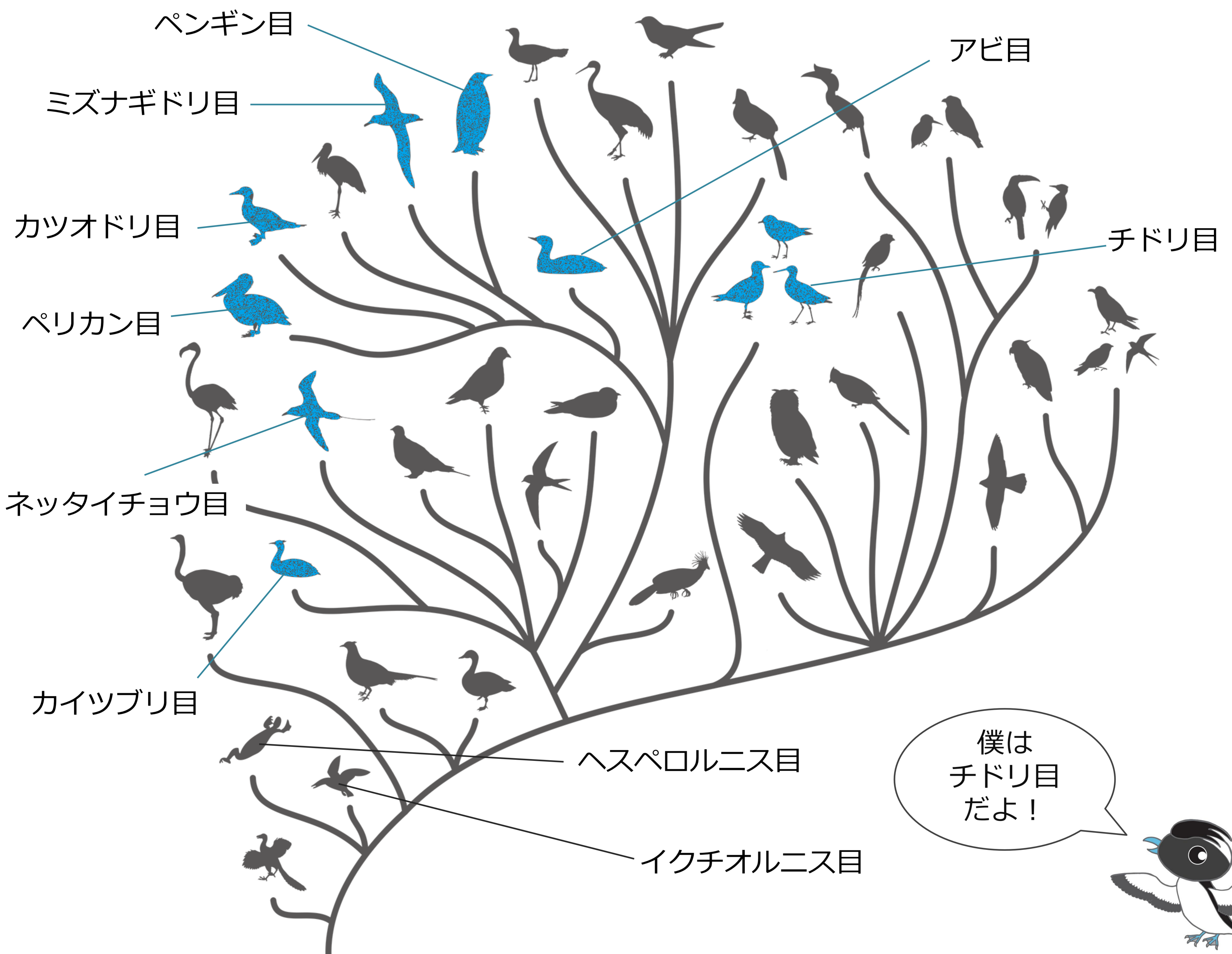
▲海上を高く飛ぶアビ。繁殖期以外
は海で生活する。



海鳥にはどんな種類がいるの？

ふつう、海鳥ぶんるいに分類されるのは、ペンギン目・ミズナギドリ目・ペリカン目・ネッタイチョウ目・カツオドリ目・チドリ目もくの6つの目の鳥です。これらに、海で生活することの多いアビ目の5種・カイツブリ目の20種を加えると、世界の海鳥は350種ほどになります。これは、全世界の鳥の種数のおよそ3%ほどに当たります。

絶滅した古代の鳥類のヘスペロルニス目やイクチオルニス目も、海を生活の場にしていただけと考えられています。かれらは歯のある鳥類でした。



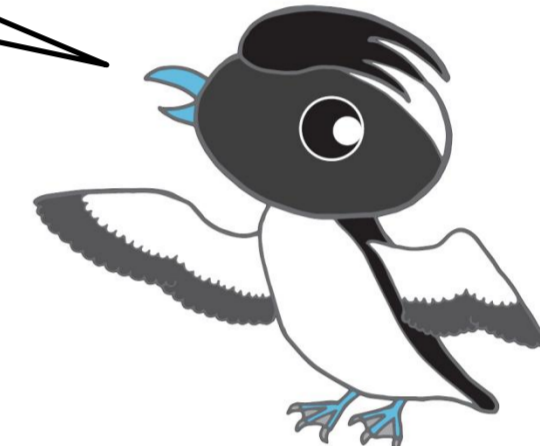
▲鳥の進化の枝分かれを示した系統樹しんかの中で、海鳥がどこに位置するか示した図。青色が海鳥を含む現在地球上で見られるグループを示す。海で生活する鳥はさまざまなグループけいとうじゅにいることがわかる。



海でどうやって暮らしているの？

多くの海鳥は、1年のうち、繁殖期（=卵を産んでヒナを育てるとき）しか陸地に帰りません。他の時期は、日々の餌とりや渡りなど、ほとんどの時間を海の上で過ごします。繁殖は、鳥の生活の中で一番大事なイベントで、ヒナを育てるために最もたくさん餌の得られる時期に行きます。種類によっては秋や冬に行うものもあります。

カモメの仲間のウミネコを例に、海鳥がどんなふうに1年を過ごしているかみてみよう！



夏

はんしよく
繁殖

巣を作って卵を産む
繁殖地と餌場を
往復し、子を育てる



かん う
換羽

全身の羽毛が
生えかわる



秋

越冬地への渡り

幼鳥は一羽で渡る



繁殖地への渡り

初めて繁殖するのは
4年目以降



春

えっとう
越冬

餌の多い海域に渡り、
次の渡り・繁殖にそなえる



冬



海鳥の巣ってどんなもの？

海鳥の巣の形はさまざまです。巣穴を掘って繁殖するもの、^{しゃめん}斜面の草地に巣を作るもの、岩の割れ目などに産卵し、ほとんど巣らしい巣を作らないものなど、いろいろなタイプがあります。海鳥は他の鳥に比べ、大きい卵を少ない数だけ産んで、ゆっくり育てるものが多いのが特徴です。一回の繁殖で産む卵の数はミズナギドリの仲間では1個、カモメの仲間では2～3個ですが、ウの仲間では多い種で6～7個になることもあります。



▲巣穴内のオオミズナギドリと卵。
土に深い穴を掘って巣をつくる。



▲港の人工物で営巣するオオセグロ
カモメ。巣材は^{かいそう}海藻など。



▲ササやぶで営巣するカワウ。木の枝
の上に巣材を運んで巣をつくる。



▲コアジサシは砂浜などに浅いくぼみ
を作って産卵する。巣材はほとんどない。



海で何をどうやって食べているの？

海鳥は、その生活のほとんど海上で行うので、もちろん餌も海でとります。大小さまざまなサイズの魚、イカ、オキアミなどのプランクトン、エビやカニ・貝などの底生生物など、種類や時期によっていろいろな餌を食べます。餌のとり方も、生きている魚を追いかけてたり、死んで浮いているものを食べたり、他の鳥から奪い取ったりさまざまです。いろいろな餌のとり方を見てみましょう。



▲海中に飛び込みダツの仲間を捕まえたカツオドリ。船に驚いて飛び出したところを捕えた。



▲浜に打ち上げられた魚の死体を食べるニシセグロカモメ。カモメの仲間には他の生き物の死体をよく食べる。



▲流れ藻の中からエビの仲間を捕えて食べるアカエリヒレアシシギ。



▲小さいイカを捕えたコアホウドリ（右から2羽目）から横取りしようとする別のコアホウドリとオオトウゾクカモメ（左手前）。



海鳥ってどこから来るの？

日本で見られる海鳥は、一年中同じ^{かいいき}海域にいるものは多くありません。ほとんどの種が、餌の多い^{いどう きより}海域を求めて、季節によって住むところを変えています。1年での移動距離は長い種では数万キロに及びます。



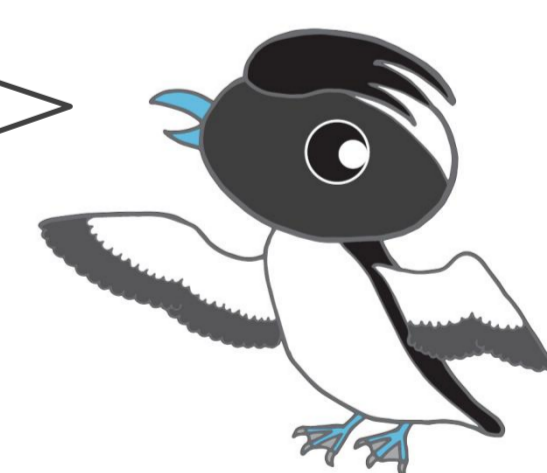
繁殖地の南極では、
ペンギンのヒナを
襲って食べているよ！



日本にやってくる海鳥の中で、最も遠くから渡ってくるものの一つが、オオトウゾクカモメでしょう。南半球の夏に南極大陸で繁殖し、繁殖が終わると北太平洋に北上してきます。実際に、南極大陸の繁殖地で足環をつけられた個体が、北海道沖で回収された例があります。



ウミネコは、日本では
普通の種類だけど、
世界的には日本の周り
にしかないんだよ！



ウミネコは比較的短距離を渡る種で、九州より南に渡ることはたまにしかありません。沖縄県やフィリピンで見つかった例が少数あります。写真のウミネコは、青森県の繁殖地でカラーリングが装着されたものが、千葉県で再び見つかったものです。



海鳥はなぜ白黒なの？

いろいろな海鳥を見てみると、黄色や赤など、鮮やかな色の種類はほとんどいないことに気が付きます。さらに、多くの種が白黒で、背中側が黒く、お腹側が白色です。全身白や黒の種類はいますが、逆の組み合わせはほとんど見られません。これはなぜなのでしょう？



みんな背中が黒くて
お腹が白いね！



この配色は、海の中で浮いたり潜ったりしている時の目だちにくさに関係しています。上側から見ると、海の底は黒っぽいので、背中側が黒いと目立ちにくいのです。逆に、下から見上げると、太陽の光によって背景が白く見えるので、お腹が白いと目立ちにくいのです。こうした配色は、「カウンターシェイド」と呼ばれています。これにより、餌となる小さな魚や、海鳥を捕食することがあるサメなどの大型の魚からのカモフラージュに役立っていると考えられています。



▲足の色にもカウンターシェイドが見られることがあります。カムムリカイツブリの足の表側（左）と裏側（右）。足を使って潜るとき、表側が下になります。



海鳥は塩水を飲んででも平気なの？

海では淡水の飲み水が得られません。海の魚を食べ、海の水を飲んでいれば、体の中の塩分濃度はどんどん高くなってしまいます。沿岸に生活しているカモメ類などは、毎日のように河口などで水を飲んだり水浴びをします。しかし、陸からずっと離れたところに生活する海鳥たちはどのように対処しているのでしょうか？

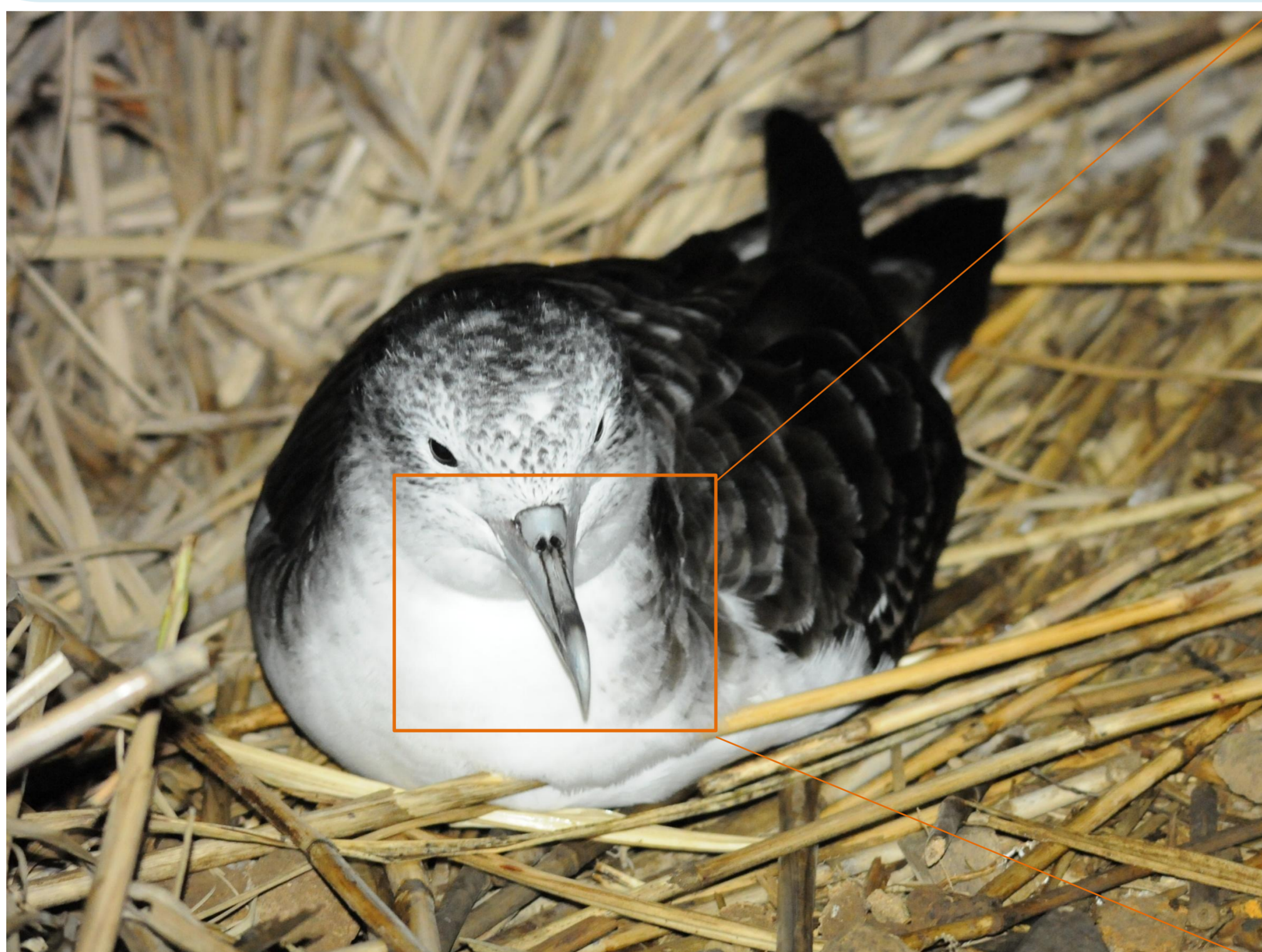


▲水浴びに集まるセグロカモメの群れ。



▲発達したオカヨシガモの塩腺。

海鳥や、塩分の多く含まれる餌を食べる鳥では、目の上に^{えん せん}塩線と呼ばれる特別な器官が発達しています。血液がここを通る時に、ふるいのように塩分をこしとることができるのです。ここで濃縮した塩分は、鼻の穴から出されます。特にミズナギドリ目の鳥では、鼻の穴が管状に変形していて、勢いよく鼻水のように吹き出せるようになっています。



▲オオミズナギドリ^{かんび}の管鼻。ここから濃縮した塩分を排出します。



カムムリウミスズメってどんな鳥？

カムムリウミスズメは、小型で白黒の海鳥です。頭部に黒くて長い冠羽があることから「カムムリ」、大きさが小さくスズメに似た声で鳴く海鳥なので「ウミスズメ」という名がついています。地方によっては、「まごたろう」や「ちんちく」などと呼ばれてきました。



▲卵を抱くカムムリウミスズメ。雌雄が2～4日おきに交代で抱卵する。



▲岩の割れ目にあったカムムリウミスズメの巣と卵。ほとんど巣材は入れない。

3月から4月に無人島の岩の割れ目や、草地の中に掘った穴に2卵を産みます。抱卵期間は1カ月と長く、ヒナは眼が開いて動ける状態で生まれてきます。2羽のヒナが孵化すると、最初の晩に親に連れられて繁殖地の岩場を抜けて海へ出ます。海上で1ヶ月半ほど親の世話を受けたのちに独立すると考えられています。

同じ属のウミスズメはよく似ていますが、冠羽がないこと、体が少し大きいこと、嘴が黒とピンクの2色に分かれることなどが異なります。野外で遠い場合にも、頭の模様の違いがよく目立ちます。



ウミスズメ（左）とカムムリウミスズメ（右2羽）



カムムリウミスズメの旅

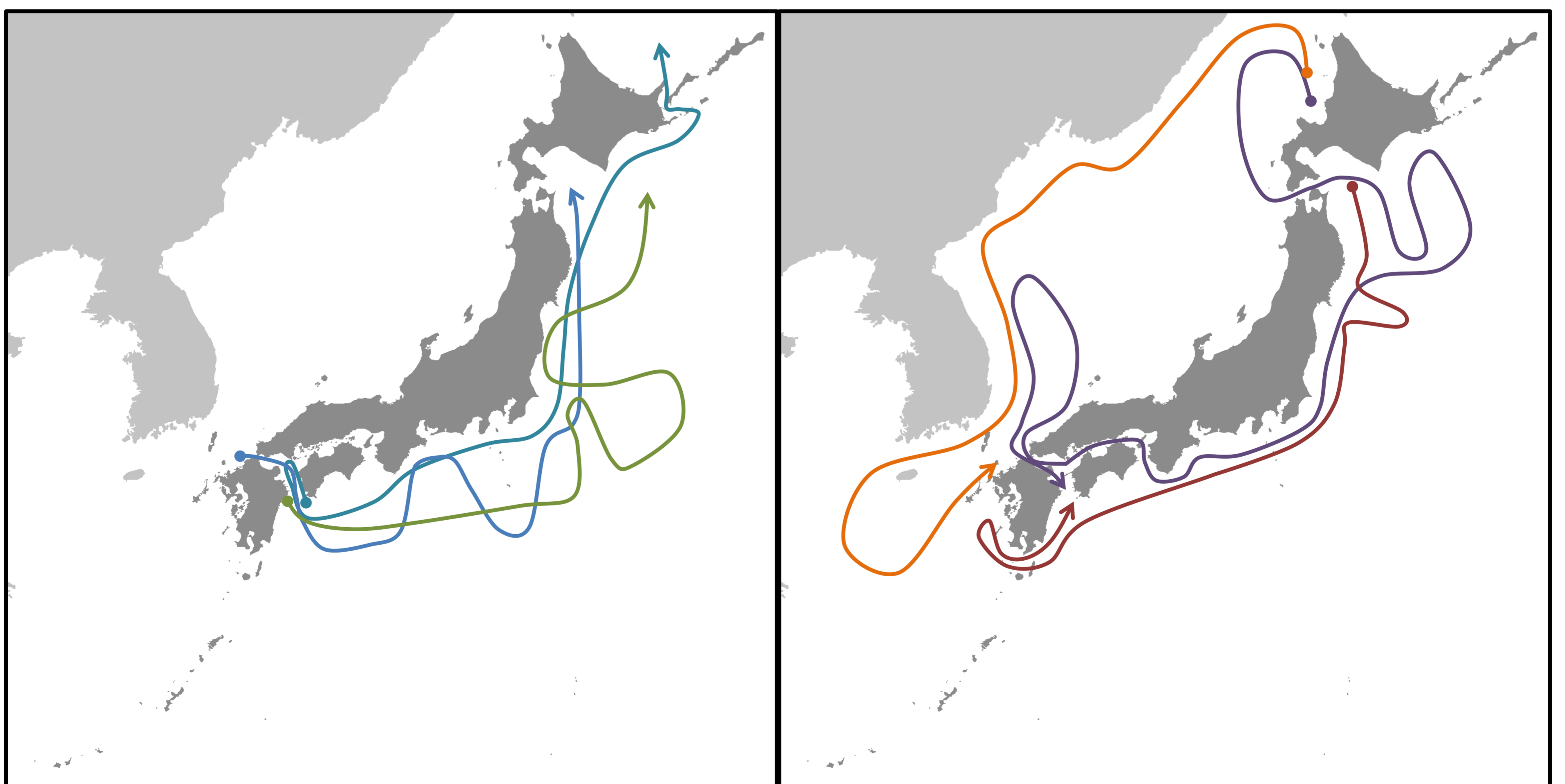
カムムリウミスズメは、ほとんど渡りをせず、繁殖期以外も繁殖している島の周辺にとどまると考えられてきました。

しかし、最近になって、非繁殖期の夏から秋にかけて、北海道沖などで頻繁に見られることが明らかになると、夏に北上する渡りを行っているのではないかと推測されるようになりました。



▲青森県沖で観察されたカムムリウミスズメ

カムムリウミスズメの渡りの経路を確かめるため、九州と四国の繁殖地で、ジオロケータという位置を記録する小型の機器をカムムリウミスズメに取り付け、渡りの経路を調べる調査が長崎大学の山口典之さんたちの研究チームによって行われました。その結果、3か所でそれぞれ1羽からデータが回収され、実際に季節的な移動を行っていることが証明されました。この企画展では、これらの研究成果と、実際のカムムリウミスズメの記録をもとに、渡りの経路を推定しています。



▲ジオロケータにより調べられたカムムリウミスズメの渡り。
4～8月の北上の経路（左）と、10～2月の南下の経路（右）。
Yamaguchi et al.(2016)より改変して図示。



カンムリウミスズメの学名のひみつ

学名とは、世界共通の生物の名前で、ふつう、属名と種小名の2つの語で表記されます。カンムリウミスズメの学名は*Synthliboramphus wumizusume*です。属名の*Synthliboramphus*は、つぶれた嘴、という意味で、この属の鳥の嘴が短めであることから付けられています。一方、種小名の*wumizusume*は、一見して、和名の「うみすずめ」が由来だと思われそうですが、つづりが少しおかしいことに気がつきます。なぜ「*umisuzume*」ではないのでしょうか？

学名は、一度付けられると、混乱を避けるために簡単には変更することができないので、間違っているとしても手続きに従って付けられた名前ならば、使い続けなければいけません。そのため、このおかしな学名のつづりは、「*umisuzume*」を書き間違えたものではないかと言われてきました。しかし、当時の状況が詳しく調査された結果、どうもそうではないらしいことが分かってきました。

江戸時代後期に来日していたシーボルトは、日本産の多くの動物の標本をオランダのライデン博物館に送りました。九州の周辺で採集されたカンムリウミスズメの標本も一緒に送られ、動物学者のテミンクにより新種として初めて記載されました。シーボルトの標本は、助手のビュルゲルによって、送り状をつけられて本国に送られました。その送り状に書いてある日本語名「*wumizusume*」はビュルゲルによって書かれたものでした。ビュルゲルは他の種も「すずめ」を「*zusume*」などと記していたようです。

実は、オランダ語では、sとzの発音はそれほど明確に区別されておらず、sとzを混同した結果、こうなったようです。また、最初の「う」を「*wu*」と記しているのは、九州地方では地域によってはこのように発音されるためのようです。つまり、ビュルゲルがほとんど聴いたままに「オランダ語風に」表記した結果、このようなつづりになったのではないかと推測されます。

ちょっと変なカンムリウミスズメの学名には、集めた人のバックグラウンドや、標本が収集された場所が影響していたのです。

文献：山口隆男（1994）日本の鳥類研究におけるシーボルトの貢献. *Calanus** 11: 23-150.

*熊本大学理学部附属合津臨海実験所報

